

掌中嵐雪護句集

編初

全

70

1

2

3

4

5

6

7

8

9

80

1

2

掌中嵐雪發句集初篇

春之部

改正

比海渡魚のさくら年 万葉の春
 え日やまねく 荷乃物かごと
 面くの塘をけしふや 花のさる
 今朝まの奥跡もけり 春もみ^{ホメ}権と置
 五十ふと 四谷をらんくろ 花のま

む免一掃一アん布と姑阿くかき

はるある集よ冬き能入くう
又あり物ころ

水とりふ一字歌

手結ゆぬ宵中を梅の林少りか
梅ちるや齒のちるに知く

初夜のぬく京うらまふとそ出ぬめうめ
笑東あく知入るまきくよまのちるのう
くといひかちて半くそ阿知のむのき道

ありあけくぬ厚とに帰と来たさ
あれといと名残あ

梅よとむる物もあきるる幸さこの

椿

鑑のかく目かんし地花はさき

歌しころ

正月をす月よあうそ難考大か
下壇の花うさそあうん南那雅

せうしやうさきとて疲よりけり種活
落のさうほうもく人の強の那
をんまよかろく

わかれも急猫よ物新體てうろけり

燕

簾よ入るゝ美人よ列るゝ燕が
柳よあそびたのれ嵐ちり夕燕

帰る

明鏡よあまのり ぬるる如

惜別

虚をを引とて免れやいふれを
改更り鄰かへをるにや流るる
砂夕へ新體なるらぬいふれり

蛙合

うしややさぎの芥とゆく 蛙
上野よりあがりゆるる

酒くらひ人よかきまる 胡蝶うぬ

終身

中川やちをきても 終身

おろしやま門平 浪辰の市

橋

えきまのち花ももちうらこ 橋 穂が

苗代

あつし 橋よ老のちうらや 鹿たまに

上巳

うほは女の雛かつくそ 衣たる

さきのあまき 橋のらん 州乃 橋

汐下

汐下らん 橋のらん 橋のらん

桃

桃の目や 蟹ハ美人よ 笑らん

美

白雪乃酒と吐く人それのや
花と風かろくさそあけ酒の泡
梅川を流る流る梅の里を
膝木よる女のをや糸はる
殿は特妻餅うるはる糸を
子習師を車は花の児
兼好の楚たりりり花さる

頼光山入之賛

花はる風おとれをり山さる
花片く散りたる古木の葉
花のまひとあや火明行
女中^{アヒセ}花の先達
大和島に東潮を吹く風車東風
あつし西の吹をくれ前後
多岐路根をよ形より大井川越
より大広一空に風の何の吹

遠坂を園忠跡ありそのま
大井川 船有とくそれ乃たひ

擲濁

おはししまくくうちう角やう

友 初より果て

あち浪又鵜 ミサゴ 多坊よりいこ橋

小奴喜翁よ花を忍せき

小坊よよ足あけうおん 松よ友

夏之部

更衣

塩奥の裏ほ日あり衣うえ

襦袢 野より捨とれと捨う那

喜翁

五位六位 逸ころこ海せと青すこえ

時鳥

引燈を舟の歌よせん初と支流

山岸香白

本とまき尻恥き道具かろらん

待乳山の社政は夜をふかきこ

空と曇るは蚤籠のときぬ郭公

時急鳴や利休乃落し穴

悼晋子母

啼りりききもれしものを時急

中とくきん旦夕里さひ煙う川比

流成糸いふる節をけこきす

舟とまうり

櫂柔あやうは花乃飯をるる

川骨や櫂よ潮め乾夜も楽

短の偈を連ふるとまぬ時急

ひえるの晋子退るるの吟ありき

懐旧

かゝひるる様をうけおとす

牡丹

山崎香雪

古くはよりのありとほほとん分

土嘗くまのむ顔の牡丹哉

青嵐

まのりし定まる時や苗の急

新樹

よみふく風やたんとお割す

ころの海邊より

夢のよも下園此紙懐るな

大勢の中へ一本から不う那

然也

若くはたぐまてもお悔愚わと

善と大悲観世者かさとと絶うと

うゝの連まう

素笑ふも名とくの老女疑違若

燕居も危うく見りてこれと

一糸の縁を形まらうと交もあり

五月廿九日

箏

舟の子やわがと舟の糸の隅よも
善悪もよそみる吟なる尾よ

海松をさやわれとてしも寺の尾

渙父

義ほくく軽くくあふ螢う那

照射

方杖よ舟よりく歌の心よりうな

端午

あふり尾の長をくく耳昌蒲うな

世の阿なめえんまや菰乃髑髏

曾根ち糸をせり糸根糸糸とらる

片足ハ袋よ放つてかあこの那

粽一さき全阿袖やうあは福やう

かこむまきとらる

粽ゆ川おとらうはく乃まむまひ

ナ

標佩くわさく免うーや芝肴

平地

おもふ人よあされ平地のそと礫

競馬が又茂

落すもろくそに目まやあー採

抜劔逐蠅

蠅ももさ怒るゆよ子束弓

顔はほく飯粒蠅の折めーを

題ーくは

それよまねに絶めや金の蜜

免つしや唐の故侍人を喰つく桃虫

こゝ強しやかの故美人の怪子こゝれ

瘦く柳又似きりか烈の故く

唐の故や終る枯らる藻塩ま

砒白ハ唐紙又故と濡れらるよ多岐行

故書来や芥よ女の石をうけ

片巻新

菜羹

山茅萁のかさゝや重きあゝ嵐

夜雨吟

又りぬや祝はれず於唐かゝし

とらゝあんや蚯蚓の徹は錦の枝と

題しらす

常時喜を入あやゝニツちし

あし女よかへく死する菜飯う邦

三河鳳来寺

一車らのあかひを登る山路うね

赤妻歌

櫻明や妻をうらむるさゝと

六本木うら

下雲如地虫あゝ乃櫻の枝

あれうあゝあゝあゝあゝ櫻のあえ

江の鴨

嵐室切

士

夏の日や さきく 崖のらふひり
稲村の勝せらるる木陰ともあはれなり
うへは 渙父のこころごとくかきまじりて
をあらうとせしむる

照付く 雲りも暑し 海に上
貝らるる家の四方のまじりて夏の影を
ゆりてかきまじりてあめさるる水せめて
登の子にたうと加うせん 道明寺

長谷ちの希まき

館 赤欠のひかりさきくや ゆりの花
孤見堂 かくはるるとりふあり
行ぬらひ 小ねく 平く 沖津風
雪の下は 泊り 侍り ころは ぬかりたさ
本とく けかきかき せれたを みとじの
あらよむしるあはれ

川 草のまきはる 白ふ 後りう 船

行下橋を風すく風竹襦袢
ざんざん和沖さなまや汗拭

目息の滝も人のまふてぬ日

度しき川心乃廉そふ川を流く

夏烟よりくくく思穂うね

河橋

今日の日を東の隅よりむとる水の方に
おさゆる春日紅秋の項上るりとそはまの

法ある家くくくくくくくくくくくく

ゆきくくくくくくくくくくくくくくく

む後まきき御ありたし

いくはくみ喘息つきそ復はくくく

ちんちん目のかくくくくくくくく山

秋之郊

初秋

秋風の心くくくくくくくくくく

はるりあけ糸とひらきや秋の風

葛

齒の河とみわを葛の枝あけう表

宗祇之廟

石塔をまててて休む一処ふら那

市中

盆とる秋あき門乃灯籠が

七夕

其表まやあうかきとる五人の川

わい合や警女も糸ひの糸とらん

けい合の姦妹うさん待女糸

防鴨河使

妻越や人目泣みの河流を

瓶の紫とあうさかくとる

糸やあぬひと夜より糸天の川

糸流りえの隅田川原の檣柱

飛鳥并さんえとの磯鞠いぎの坊のま花
こやこ花田丈いぎの風流まきくかろり
居くくはあや

秋のうらをぬくまむ

薄

花まのた踏子つまきくさけか

お川へ二里お休や花すま

聖の集

おやうろく富士にまきくふ花聖

おの秋草は冷あく形さるる

盆のうらを切歌あく一字を探る

洗

か^潜らさく色くくはこ花花のあ

虫 寺

花蛇や寝あくくはありくす

叢虫のまきくはあくまの菴 芭蕉翁

夢よゆきき

洞もききあり稲うららきききき

お蔭

さあのお蔭をたひわりけよ蔭の玉

うすひ様現るそ

いなつまたのききぬ神子ら目きき

鶉歌

まごふたふあきひや蔭鶉歌

朝叟とてあふ

蓮の實はあきとひしうそもそんえ

同一周忌

まきくあひとくあきく一周忌

西瓜

あひとくあきとてあきくあき

盆會

喰むたを皆あきだし魂まき

多戸柳や皆く庵くと若子何く

河去る略

を庵をありて安ら 影を心とてこたうり

九日の古たまたの月小野のたつむらう

冥途よかよるたあやとて流中たあ

流まきく橋のたあどりのをて魂とむら

平とく侍る

おもひくく柳とてあうくむ久人種

霊柳の粟よとてあうくの字か車

あうみやま流やとあうきを庵あき名のわうれ

こままるあひ千早のたあまはあうとまうあ奴

盆のこたあああうとて群集くとて逆縁平

とやうあ人もあまを侍りあを改名嵐を月

照と名の塔あうと形入まうりあうまうとたと

あうねとあうかうとあひうあうあうえ侍り

まねえ

夢よよく似し言ふは秋暮より

松の傍に秋の火

絶を焼く火のたうとを秋の火

大文字の分をもと免とれを

山の端をたうもんを大文字

子車と動へようはうたう人けとを

橋原の介もをむや 藍 島

度りも賣^{モス}以不野乃 菜 穂 子

蘭 鮑 同 肆

盗くも 菜 や 乞 食 乃 簞 乃 下

秋 暮

寐く起く又 寐て見ても秋の暮

殊の暮 石 山 寺 乃 鐘 暮 乃 は

月

念 月 や 烟 遠 しく 水 乃 入

死 折 新 葉 冬 乃 不 ぞ 想 へ

系飯の狼藉をする一客あり

名りる樽もあはぬ梢の那

明りや先蓋をりて苔藓と興

海も山も坊をふりりりりり

ひさきの紐かまうのろろ松江の籠籠

わさぬへり組板をちりしきささ海の

流拍ちり江のひきもの心よあひんを

よされよあられよあまこころの心あり

あふれぬきり

秋くさる樹くすぬりみみあり

名りる絶きる餘のひりりあり

何れも略

早雲も名りりの雲もあはぬ

り小雲傍の泥足たつしき顔もく

目まれぬうつら拍をおりりりり

新海の心をえたり 唐強骨

明月や后心の名のおもひしるき
聲とく弁よりとくぬ月見の

信濃催る樂

君身はを移らばせん信濃のまをけ

新酒

神美草

新酒もよし新酒と人の醒やすま

歌あはれ

水村山廓 酒於風

阿しの穂やおやちと峰の波しる

木犀の晝を醒する 香炉の如

柿栗

ひとり娘あふ柿うささ顔ハ雅

標第

林間よ黄葉する日をたぐふ宛

くら木とまおほしめされそ振草

菊

初菊やかしらの頬の白さほど
指し入る 風を也 雲々〜りふれ葉
菊九章其一九日

菊もまごつゆくつほむ 九日

其二 素亭亭とて人々葉
見れん

かられぬやうめ葉の中は 変る葉

其三 百菊と拵けり

芙蓉白菊を介の名をわくもが

其四 名所の菊

白きくみ 鎌倉やすほと 扇う谷

其五 昔のたけのこあひやうある所のきんこ
と〜葉をてをまや

花のぬる葉七尺 乃なり 兎この那

其六 琴

琴る 琴る 葉をうなはく 琴るな

其七 碁

碁 碁るふら又碁よまけ〜人やん

其八書

其八書

半を抽芭蕉は孫少れ葉の児

其九盆

葉さけと蝶月と遊へ誇の具皿

京よりかゝ誇へ指るとそとるの

山嶽をすることある

志か笑越とわろく〜彼や葉の花

斬りてをのれと笑ぬまゝく踏登

表の葉杖らまぢれたおきふも

誇の菊よと朝の餼と〜胡蝶は

誇とさ〜蝶を飾らるゝ葉は葉

されをそひなの柏子のわちるゝ邪

伴田葉のほくみり川を 蚊足

ひやう〜さへあつまぢり〜や

死す〜死大急流をまつらうを

初まらる

種つるにもつれ〜そとや葉の時辰

其八書

其

十三

孤林ひる糸

牛まれば柔皮をかくは 絶る糸
 莊子樗木の大きき牛をかくする糸の碎
 さえを一少くと名化されんと放散道遥
 のふをむれるあり
 ちりぢりも二度の情や 梅をまら
 まうまの正て

暮の紫や海をのぞくかゝる時

冬之部

十月蟋

ころもくは 氣の巢こそ 鳴強ぬ

風

木かもし 梢の柿乃 名残の那

芭蕉翁回卿

風の吹ゆるく ころもくは
 一葉のいろも ちかき 月夜

山家集

いささかのあそびあそびも消えては

延喜帝

を救ふ国土の民もかきうらんとお
のちとて御教とぬを給ひらるるあり

脱あまうの御衣もて下給衣う那

野

野ひく紀の日を忘るる野々古草

冬の日あをわしてあま

君見よや我子いろそ草の桶

河沙

鴨あうくあまそ歩む水う那

野夷集

あそびの嵐やつむひらまあみそ

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

喜 夢 月 七 日 の 心 づ け 上 の 籠 子 受 付 ち
 の 家 上 へ び ぎ ぎ づ 空 華 散 一 水 月
 う ち ち ち 守 付 心 鏡 一 壺 せ び ぎ ぎ ぎ 万
 象 よ う ち 守 付 師 子 の ち ぎ ぎ ち ち ち
 ち ち ち ち 利 し 他 を 利 し ち 終 ち 其
 神 不 謁 今 を ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 比 下 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

十月廿二日夜

十月を夢うとけりりけりりちりりちり

四七日 題翁三物

本わりの猿も到深り義と立

十一月十二日初月忌

泣中より夢を蒙りひりり 耐へりり

え録乙亥十月十二日一周忌

夢人の籠を魁めを 納豆火

七四忌

雲時返きんもじうや坐興竜

十三回

ふくの蒲団よのちる木奥が

帰依法肉をの菜と喰ふ

飯のやうな腹とさするあけ敷が

坊と泣くきりり

あふりこもるをよかごひのりあ

神楽

かろ舟漕の釘の街火白くさけ

雲

蛇もせよ木兎もせよゆさの猫

初をや襦くとぬ白丁花

今の橋田よゆり門も見すてて

旅路の火を討さうにこそ雲の巻

め鼻をとる食もまんろる巻のそん

巻の中い巻を投込ふあそひう那

雪をまきうさる 先づ深家の筑波山
けり雪平むらひおる人も人

阿ふれ

顔出しくもつとどうらん玉あふれ

画賛

細中より静やす 拂

歳書

山伏乃んまらむま 師をた

古足袋の四十よ 足とあふれぬ

慰女房

三盆子とあふれぬや 年結書

古曆けく交人うらまふらん

思見すと妹つくろひぬえ人の門

新の換梅を標るに おほつちや

足をさへ吹ぬ 葉集ふらねやみ

けりる家とやうらまふ少老の住居の

ふり交り服をまゝやまの吟きよ
著まらうららく肩整白く年の暮
猿猴のてふ子とわらやまのこれ

辞世

一はあらう吐一はふらうたぬのう

江戸本石町十軒店 萬笈堂英平吉藏

其角發句集 二冊 嵐雪句集 二冊

蓼太句集 六冊

俳諧文集 二冊 蟹守大人輯 高村言多の俳人の文珍輯

發句古今撰 三冊 同輯 附葛里連句集

俳諧新五百題 二冊 護物大人輯

新五百題 後編

同輯

二冊

發句類聚

蓼松大人重校

二冊

發句類題

雪中菴大人輯

二冊

發句五百題

白雄房撰

二冊

俳諧恋のまこと

律雪庵北元大人輯

二冊

恋のまこととは恋まのよ恋の形あるさふよりて
恋の詞をうりし集む

俳諧手焼灯

季考の書と

二冊

袖のくさ

季考懐中小本

一冊

俳諧四季名奇

懐中本落葉摺
季考大成より

一冊

俳諧季考便覧

懐中一牧摺

萬葉用字格

春中上人撰
万葉集の形をく

一冊

定家卿の形巻

一冊

